

サロンでの気づき

サロンを訪問させて頂き、気づいたこと、聞いたことなど、お伝えしたいと思います。何かお役に立てれば嬉しいです。

会社の玄関に植えたノースポールの花がたくさん蕾をつけてきました。

サロン様の店内外にもいろんな花が咲きはじめ、寒かった冬もようやく終わり、春の訪れを感じます。



先日、カープのオープン戦を観にマツダスタジアムへ行ってきました。今年のカープは本当に楽しみです。



それではサロン様から教えて頂いたこと、感じたことをお伝えさせていただきます。

役割

人は何故生まれてきたのか？

ある先生は、自分に与えられた役割をまっとうし、人のお役に立つために生まれてきた。と言っていました。

仕事は同じ

たまたま巡り会った仕事が違うだけで、その道を極めた一流の人は、他の仕事をして同じように一流の仕事をすると思う。

ホームケアの大切さ

お店を出して20年以上になりますが、オープン当初からサロンの商品を使っている人と使っていない人とでは髪の毛の元気が全然違うと言っていました。

新しいこと

新しいことにチャレンジすると、売上はプラスになります。

トイレ

いつも紹介させて頂いている本屋さんのトイレは、店外にあって、誰でも自由に利用できるのに汚れていても仕方ないと思うのですが、いつ行ってもきれいになっています。掃除が行き届いているので、利用する人もきれいに使っているのだと思います。

私は、コンビニを良く利用するのですが、トイレの汚いコンビニに行くと嫌な気持ちになります。コンビニによって品揃えの好き嫌いは多少あるかもしれませんが、大差はないと思います。それよりも、トイレの掃除、店員さんの応対など、ちょっとしたことに大きな差を感じます。

人を許す

サロンの先生から、今の人は気の短い人が多く、人を許せない人が増えていると聞きました。自分に厳しく、人には優しい社会でなくてはいけませんね。

与えること

あるサロンのスタッフさんが、『先生の下で働らせて良かった。先生は自分のことより、スタッフのことを一番に考えてくれるから幸せだ』と言っていました。



4月からの消費税率引き上げに伴い、増税分の3%を上乗せするサロン様が多いと思います。そのため来店サイクルの伸びなどが懸念されていますが、このような時こそ、自店の売りやサービスをしっかりとお客様に提供して行くことが大切だと思います。

致知4月号に参考になる記事が出ていましたのでご紹介させていただきます。

浅井周英(教円幼稚園理事長・園長)

教育哲学者・森信三先生との出逢いがなければ、私はいまとは全く違った人生を歩んでいただろうと思います。

一介の小学校教師だった私が昭和46年に初めて森先生にお会いして以来、その教えを日々実践していくことで、和歌山市教育委員会教育長や実践人の家(森信三先生の教えを共に学ぶ全国会)理事長という大任を務める幸運に恵まれました。まさに森先生のお導きによって生かされてきたといえましょう。

現在私は森教学の根本である「立腰」を広めるべく、大阪の教円幼稚園で立腰保育を実践しています。腰骨を立て、姿勢を正せば、変転しやすい心も落ち着き、物事に主体的に取り組めるようになるという教えです。

当園の朝は「立腰タイム」で始まります。先ほどまで園庭で思いっきり走り回っていた子ども、チャイムが鳴ると同時に靴をきちんと揃え、立腰タイムに臨みます。床に正座して瞑想している間、園全体がシーンとなり、心を落ち着かせた状態で、一日をスタートできるのです。



私が当園の運営を養父から引き継いだのは平成12年のこと。当時は近くに社宅を備えた大きな発電所があったため、園児も80名を超えるほどでした。しかし、平成17年に突如発電所は運転停止。以後、園児は減少の一途を辿り、半分ほどになってしまったのです。

これでは経営が成り立ちません。その時、私が下した決断は保育料をどこよりも安く抑えること、そして**量ではなく質を追求すること**でした。

とにかく子供にいい保育を与えよう。そうすれば、必ず親御さんが求めてくる。その信念のもと、営利追求ではなく、**立腰保育の質の向上を徹底して**いきました。その結果、一切宣伝をせずとも、口コミで遠方からも来てくださる方が徐々に増えたのです。

通園バスで園児を掻き集め、何百人もの規模にしてしまつては一人に注ぐ教育が粗くなる。我われは少人数できめの細かい、一人ひとりに目が行き届く教育を目指そう。

この原点に気づかせてくれたのは、平成17年の卒園式でした。卒園式は幼稚園の最大行事であり、毎年3月に1回だけ行うものですが、平成17年には2回举行了。

この年はインフルエンザが大流行し、皆勤賞をもらえる子はT君一人でした。T君は3年間、雨の日も嵐の日も、無遅刻、無欠席を続けていたのです。

ところが、卒園式の一週間前にT君のお母さんから電話が掛かってきました。

「先生、大変です！ うちの子、インフルエンザになってしまいました。病院の先生が登園したらダメだって…」
式を延期するわけにいかず、結局T君欠席のまま3月19日に卒園式は举行されました。

その翌日のことです。PTA会長さんが「ちょっとお話があります」と園に来られました。聞くと、卒園式の後、お母さん方で食事会をしてい時、誰が言うともなく、T君の話題になったとのこと。

「私たちの子は無事に卒園させてもらって 嬉しかったんですけど、あれだけ頑張ったT君が式に出られなかったことを思うと可哀想で……。なんとかもういっぺん卒園式をやってもらえませんか」

私は一瞬戸惑いましたが、先生たちに話すと即座に「やりましょう」の声。

私も意を決しました。会長さんにその旨を伝えると、こうおっしゃったのです。
「ありがとうございます。飾り付けも全部私たちがやります。ただ、このことをT君のお母さんには言わないでください」

実はT君のところは立派なご家庭だったのですが、事情があつて家庭内が冷え込んでいました。そんな中、唯一明るい話題がT君の無遅刻、無欠席だったのです。ところが、それも駄目になってしまった。だからこそ、会長さんはT君親子にささやかなサプライズを用意したいと思われたのでしよう。

いよいよ三月二十三日に修了証書を受け取りに来ることが決まりました。お母さん方はその日の朝早くから会場の飾り付けをし、花道をつくり、外から見えないように黒いカーテンを張り巡らせませす。卒園児も皆、席に座り、準備は整いました。

本園の教育方針

教育哲学者 森信三先生提唱

人間の土台をつくる立腰保育

◎めざす人間像

1. 人に迷惑をかけない人
自分のことは自分でできる自主性をもった人
2. 人に親切にできる人
自分の余力を人のために使う人
3. 自分から進んでする人
主体的に行動し、自分の力を発揮する人

◎良い子の約束(調和のとれた人柄の土台づくり)

1. 腰骨立て良い姿勢
心身を整え、生きる意志力・性根・主体性の土台
2. 朝の挨拶人より先に
明るい人間関係を開く土台
3. 短くはつきり良い返事
素直な行動が身につく土台
4. 脱いだ靴は揃え、椅子を入れましょう
行動に責任を持つ、けじめの土台

十時過ぎにお母さんがT君を連れて登園されました。担任先生は『こちらへどうぞ』と、ホールへ案内します。お母さんは職員室でもらうだけと思っていたからでしょう。怪訝な顔をしながらホールに向かいました。

そして、二人が会場に入ると同時に幕が開き、割れんばかりの拍手が会場内に響きわたりました。二人は驚きのあまり棒立ちになり、次の瞬間、お母さんは声を上げて泣き崩れました。迎える親御さんも涙され、二回目の卒園式は終始温かな雰囲気の中、滞りなく行われました。

後日、T君のお母さんからいただいた手紙の一文にはこう記されていました。『卒業式はこれから何度も訪れるでしょうが、ずっとずっと忘れられない息子と私の宝物です。』森先生も尊敬された教育者ペスタロッチーの言葉に『一人を見捨てる時、教育はその光を失う』とあります。

皆から取り残されている子や落ちこぼれている子、そういう**弱い立場への目を大事にしていく。その精神が根底にあれば、子供たちを善き方向へと導いていける**のではないのでしょうか。

生涯、教育への情熱を失わなかった森先生を範とし、私自身これからも幼児教育に力を注いでまいりたいと思います。

以上『致知随想』より

あるサロンの先生が、転勤で隣県に行かれるお客様から『車で2時間以内なら来ます。ここには心の洗濯に来るのよ』と言われたそうです。

質の高い技術、サービスを追求し、一人々々のお客様を大事にして行きましょう。



余白ができましたので、もう一つ
境野勝悟氏著『日本のこころの教育』より「お母さん」の
言葉の由来をご紹介します。

僕が小学校の一年のときのある日、「ただいま」って家に
帰ると、お母さんがいないときがありました。

お父さんに、「お母さんどうしたの？」と聞くと、「稲刈りで
実家へ手伝いに行ったよ」と言う。

そして、「きょうはお母さんがいないから、おれが温かい
うどんをつくってやる」と言って、親父がうどんをつくって
くれました。

ところが、温かいうどんのはずなのに、お父さんのつくっ
たうどんはなぜか冷やっこいんです。

一方、「ただいま」と家に帰ってお母さんがいるときは僕
はいつでも「お母さん、何かないの？」と聞きました。

すると、母は「おまえは人の顔さえ見れば食べ物のこと
ばっかり言って、食いしん坊だね。そこに、ほら、芋があ
るよ」って言う。

そういうときは決まって、きのうふかしたさつま芋が目ざる
の中に入っていました。

かかっているふきんを取ると、芋はいつもひゃーッと冷たい
んです。

だけれども、お母さんのそばで食う芋は不思議に温かか
った。

これは、もしかすると女性には理解できないかもしれな
いけれども、男性にはわかってもらえるとします。

お母さんが家にいると黙っていても明るいのです。
あたたかいのです。

それで、わたくしたち男は自分の妻に対して、
「日身(カミ)」に「さん」をつけて
「日身(カミ)さん」と言ったんです。

丁寧なところでは、これに「お」をつけて「お日身(カミ)さ
ん」といったんですよ。

何でしょうか。
この「日身(カミ)」という意味は？

「カ」は古い言葉では「カカ」といいました。
もっと古い言葉では「カアカア」といった。
さらに古い言葉では「カッカッ」といったんです。

「カカ」「カアカア」「カッカッ」
これが「カ」となるんですね。

「ミ」というのは、わたくしたちの身体という意味です。

ですから、「日身(カミ)」とは、
わたくしたちの身体は
「カカ」の身体である、
「カアカア」の身体である、
「カッカッ」の身体であるという意味なんです。

では、「カカ」「カアカア」「カッカッ」という音は、古代では
一体何を意味したのでしょうか。

「カッカッ」というのは、
太陽が燃えている様子を表す擬態語でした。

「カッカッ」とは、実は太陽のことを指したのですね。
「カアカア」「カカ」という音も同様です。

つまり、わたくしたちの体、わたくしたちの命は
太陽の命の身体であるということ、
「日身(カミ)」(太陽の身体)と言ったんです。

「カミ」の「カ」に「日」という漢字が当てられているのを見
れば、「カ」が太陽のことを意味しているということがわか
るでしょう。

「日身(カミ)」とは、
太陽の体、太陽の身体という意味だったのです。

お母さんはいつも明るくて、あたたかくて、
しかも朝、昼、晩、と食事をつくってくださって、
わたくしたちの生命を育ててくださいます。
わたくしたちの身体を産んでくださいます。

母親というのはわたくしたちを産み、
その上私たちを育ててくれます。

母親は太陽さんのような恵みの力によって
わたくしたちを世話してくれる。

母親はまさに太陽さんそのものだということから、
母親のことをむかしは
「お日身(カミ)さん」といったのです。